

# 大学院 薬食生命科学総合学府

Graduate School of Integrated Pharmaceutical and Nutritional Sciences

「薬学研究科」と「生活健康科学研究科」の教育組織を統合し、2012年度に自然科学系大学院「薬食生命科学総合学府」を開設しました。薬学研究院あるいは食品栄養環境科学研究院に属する教員が、それぞれの専門性を活かして学府の大学院学生の教育にあたっています。

## ■ 学府の概要

現代のわが国が遭遇している世界に例をみない超高齢社会において、健康増進によって疾病の一次予防を図るとともに、疾病があったとしてもその進行を食い止め、寿命に至るまで生活の質を維持する「健康長寿」をいかに実現するかが重要な課題となっています。この課題に対する根本的な解決のためには、「薬学」と「食品栄養科学・環境科学」の両面から「健康長寿科学」の学問分野を拓く研究者、およびその成果を実践できる高度専門職業人と指導者の養成が望まれています。この時代のニーズに合った流動性の高い大学院の創成、すなわち幅広い専門教育を受けられるような教育の流動化、柔軟化を目的としています。

## ■ 学びの特色

薬食生命科学総合学府は、「薬」の領域の薬学専攻(4年制博士課程)と薬科学専攻、「食・環境」の領域の食品栄養科学専攻と環境科学専攻に、薬食生命科学専攻(博士後期課程)を加えた5専攻からなります。

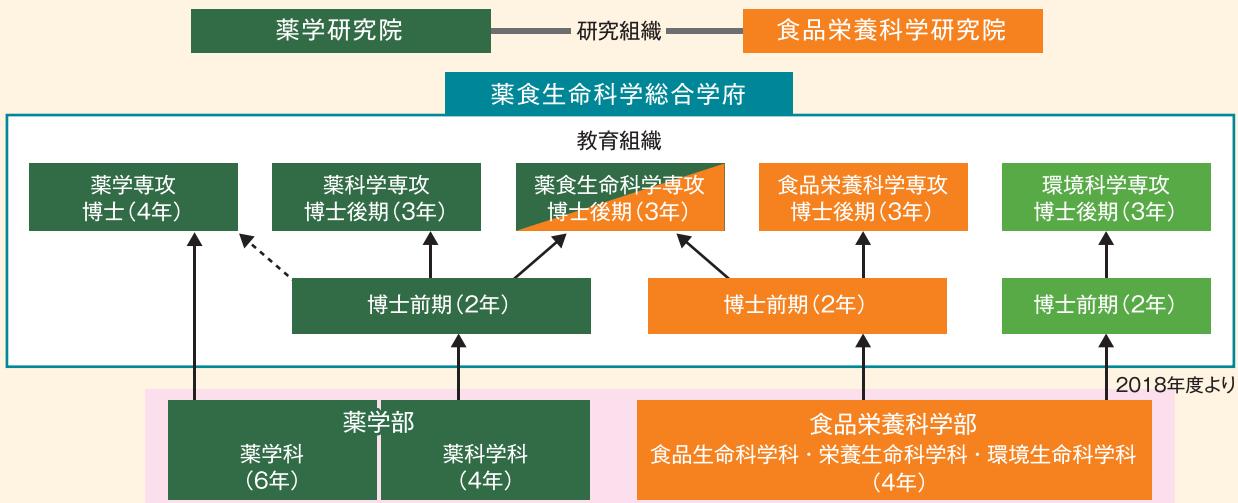
薬学専攻、薬科学専攻、そして薬食生命科学専攻の半数の講座は薬学を基盤としており、静岡薬科大学大学院以来の伝統を背景に、創薬科学や生命科学の分野で社会をリードする研究者・技術者を育成してきました。薬学専攻は主に6年制薬学部の卒業生を受け入れる医療薬学を中心とした専攻です。基礎薬学、生命薬学、衛生薬学、医療薬学など大学院学生の研究テーマに合わせて、専攻を超えた指導を受けることができる流動性と柔軟性に富んでいることが、これら専攻の特色です。

食品・栄養・環境科学を基盤とする食品栄養科学専攻、環境科学専攻、そして薬食生命科学専攻の半

数の研究室では、人類の生存基盤となる食と環境の観点から健康を統合的に探求し、食品・栄養・環境のエキスパートを育成してきました。

学府内のいずれの専攻においても日本学術振興会特別研究員の採択支援をはじめとし、学生への支援体制も充実してきました。本学府を特徴づける薬食生命科学専攻では、薬学あるいは食品栄養科学の研究を推進するとともに、両分野の教員が「薬食同源」「食薬融合」を共通認識として教育研究を行い、「薬食生命科学」という新しい学問領域の確立を目指して共に研究し、共に学ぶ特色を有しています。薬学あるいは食品栄養科学のそれぞれの分野で活躍できる研究者・技術者等の育成に加え、国際的感覚を備え、薬と食を理解し、先端的な生命科学の研究・開発等に従事する研究者・技術者、高い専門性を活かした行政従事者、高度専門職業人の指導者等の有能な人材の育成に努めてきました。

超高齢社会に直面し、メタボリックシンドローム、がん、アルツハイマー病など克服すべき多くの課題があり、健康長寿への社会的要請が強まっています。薬学と栄養学の連携は、健康長寿の実現に必要不可欠な要素であり、双方の理念と方法論を習得し技術を活用できる人材が求められています。新たな高次機能性食品の開発や食品からの医薬品シーズの探索においては、薬学と食品栄養科学双方からのアプローチが必要です。有効性に優れ、かつ安全な薬の創製とその適正使用に向けた方法論の開発や、環境因子等の解明を通じた食と薬の予防医学への活用などを通して、大学院として直接的に社会に貢献すると共に、高い資質と倫理観を有し問題発見・解決型能力を有する国際的に通用する薬・食・環境のエキスパートの育成を目指してきました。



### 薬食生命科学総合学府 専攻・講座・研究室名

薬学専攻 (博士課程)	薬科学専攻 (博士前期課程・博士後期課程)	薬食生命科学専攻 (博士後期課程)	食品栄養科学専攻 (博士前期課程・博士後期課程)	環境科学専攻 (博士前期課程・博士後期課程)
分子病態学講座	薬化学講座	「博士前期課程」は 「薬科学専攻」に所属	食品生命科学大講座	大気環境研究室
生体情報分子解析学講座	生体機能分子分析学講座	生化学講座	生物分子工学研究室	水質・土壤環境研究室
実践薬学講座	衛生分子毒性学講座	医薬生命化学講座	食品蛋白質工学研究室	物性化学研究室
臨床薬剤学講座	生命物理化学講座	生薬学講座	食品工学研究室	植物環境研究室
臨床薬効解析学講座	統合生理学講座	薬物動態学講座	食品分析化学研究室	環境微生物学研究室
医薬品情報解析学講座	医薬品製造化学講座	免疫微生物学講座	ケミカルバイオロジー研究室	生態発生遺伝学研究室
	創剤工学講座	薬食研究推進センター	食品有機化学研究室	光環境生命科学研究室
	医薬品創製化学講座	「博士前期課程」は 「食品栄養科学専攻」に所属	食品衛生学研究室	環境生理学研究室
	薬理学講座	微生物学研究室	食品化学研究室	生体機能学研究室
	科学英語講座	植物機能開発研究室	栄養生命科学大講座	環境工学研究室
	創薬探索センター	人類遺伝学研究室	臨床栄養学研究室	
		長寿生化学研究室	フードマネジメント研究室	
		栄養生理学研究室	臨床栄養管理学研究室	

### これからの中未来にむけて

静岡県立大学は2016年に創基100周年を迎え、2017年には創立30周年を迎えました。大学が県民に親しまれ発展してこられたことに感謝いたします。大学院薬学研究院30年の歴史を顧みますと、2002年に医療薬学専攻を設置、2004年には全国に先駆けた創薬探索センターの開設等がありました。静岡県立総合病院との連携は研究・教育の両面で多くの成果を生んでいます。生活健康科学研究科では、1995年に博士後期課程が開設されました。特筆するべき点は文部科学省に採択された「21世紀COEプログラム」です。グローバルCOEと合わせて2002年から10年に渡り薬学研究科と生活健康科学研究科が力を合わせ、多くの画期的な研究成果を発信すると共に、グローバルに活躍できる優秀な研究者等を育成してきました。さらに2012年には両研究科を統合した薬食生命科学総合学府を立ち上げ、我が国の健康長寿研究拠点大学として超高齢社会での健康を牽引しています。本学の優位性を保ちつつ、次の30年に向けて更なる展開を期待しています。

薬食生命科学総合学府長（兼務：薬学研究院長） 奥直人



# 大学院 薬食生命科学総合学府 薬学研究院

Graduate School of Integrated Pharmaceutical and Nutritional Sciences



## 沿革

- 1987年 静岡県立大学が開学
- 1988年 「大学院薬学研究科」が開設(薬学専攻、製薬学専攻)
- 1998年 推薦入試制度の導入(2015年に廃止)
- 2002年 「医療薬学専攻」を開設し3専攻制に  
「21世紀COEプログラム」に採択
- 2004年 「創薬探索センター」の開設
- 2007年 大学法人化により設置者が静岡県から静岡県公立  
大学法人へ移管  
グローバルCOEプログラムに採択
- 2008年 「薬学教育・研究センター(静岡県立総合病院内)」の開設
- 2012年 薬学研究院に組織換えをし  
「大学院薬食生命科学総合学府」を開設  
「薬学専攻(博士課程)」、  
「薬科学専攻(博士前期・後期課程)」、  
「薬食生命科学専攻(博士後期課程)」を開設  
「科学英語講座」の開設
- 2013年 「薬食研究推進センター」の開設

## 教育理念

健康増進や病気の予防・治療による健康長寿の実現には、適切な医薬品や食品の開発・選択と、医薬品の適正使用が欠かせません。薬学研究院では、健康維持の要因あるいは疾病の発症・進展のメカニズムを生命科学や物質科学の観点から解明し、健康長寿社会の構築に貢献すると共に、高い資質と倫理観を有し問題発見・解決型能力を有する国際的に通用する薬のエキスパートの育成を目指しています。

## 教育方針

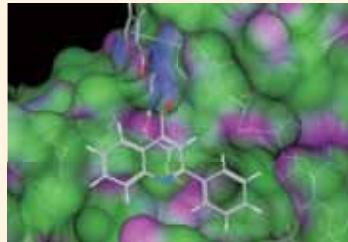
薬学研究院では教育理念の実現のため、薬食生命科学総合学府における薬学専攻、薬科学専攻、および薬食生命科学専攻の教育を行っています。薬学専攻では医療薬学や臨床薬学領域における研究者・教育者・指導的立場に立つ薬剤師、治験・臨床開発従事者を養成し、医療薬学・臨床薬学関連分野の第一線で活躍できる高い専門性を有する人材を育成します。薬科学専攻では薬学の全ての分野において高水準の教育・研究活動を行い、物質科学および生命科学の横断的・総合的研究能力を有する先端的科学研究の担い手となる科学者・技術者および高い専門性を活かした行政従事者、薬学関係の教育・研究に携わる人材を育成します。さらに薬食生命科学専攻では、薬学、栄養学、食品科学の知識を統合し、物質科学的および生命科学的観点から薬食境界領域の先端的科学研究の担い手となる科学者・技術者を育成します。

## 健康長寿社会の実現に向けた最先端研究と人材の育成

### ◇◇ 薬学研究院の活動録 ◇◇

#### 創薬探索センター

静岡県立大学大学院薬学研究院・創薬探索センターは、新しい創薬シーズの創出と創薬研究者の育成を目的に2004年に設立されました。10万を超えるケミカルライブラリーと独自のアッセイ系を用いた探索研究により、これまでに複数の抗がん剤候補化合物の創出に成功しています。現在、国内製薬企業と共同で候補化合物の実用化に向けた研究も進めています。



#### 21世紀COEプログラム(2002~2007)/ グローバルCOEプログラム(2007~2012)

本研究院の研究は国内外で高く評価され、生活健康科学研究科と共に文部科学省の学術推進拠点に選ばれました。COE/GCOEの成果は、大学の評価を上げるのみならず、電子ジャーナルの導入や大学院生の海外研究発表支援等、研究教育環境の整備に大いに貢献しました。本プログラムの教育研究は、「薬食生命科学総合学府」において発展的に継続実施されています。

#### 大学院特別講義と薬学月例セミナー

毎月開催される薬学月例セミナーと随時開催される大学院特別講義(年間約30回)では、著名な研究者等を招いて最新の研究成果をご講演いただいています。大学院生はこれらの特別講義を年間10回以上受講しており、最新情報の収集と研究マインドの醸成に役立っています。

#### 国際交流

薬学研究院では多くの国際学術交流が行われています。2014年には中国浙江省医学科学院との共催による第11回日中健康科学シンポジウムが、2014年及び2016年には薬学研究院教員主催による第2回及び第3回薬食国際カンファレンス(ICPF2014、2016)が開催され、健康科学に関するトピックスについて、国内外の研究者との学術交流がなされました。

### 薬学研究院10年の歩み

#### 薬食生命科学総合学府

薬学教育の6年制の移行ならびに本学における薬食連携研究のより一層の発展を目指し、2012年に薬食生命科学総合学府が設置されました。本学府には、薬学関連大学院として、創薬・生命科学分野で社会をリードする研究者・技術者の人材育成を中心とする薬科学専攻(博士前期・後期課程)、医療現場で活躍できる薬剤師の養成を中心とする薬学専攻(4年制博士課程)ならびに薬学、栄養学、食品科学の知識を統合して薬食境界領域の先端的科学に取り組む薬食生命科学専攻(博士後期課程)が設置されています。多くの修了生が、製薬・化学・食品関連企業や国公立の試験研究機関の研究者、病院・薬局薬剤師として活躍しています。

#### 薬食研究推進センター

2013年11月1日、薬学研究院の附置施設として薬食研究推進センターが開設されました。本センターでは、健康科学の発展及び健康長寿社会の実現に寄与することを目的として、事業化を指向した医薬品及び機能性食品・素材に関する学術的な基礎研究の推進及び臨床研究への支援と共に、薬食に関する情報提供ならびに専門職および研究者の養成に関する支援を行っています。



#### 科学英語講座

科学分野で英語を使いこなすことができる科学者を育成することを目的として、2012年4月1日に科学英語講座が開設されました。本講座が開講する講義は、科学者のための基礎英語だけではなく、ディスカッション、論文作成、口頭発表のための専門英語の習得を目指すものです。科学分野でのコミュニケーションを成功に導くために必要な、重要かつ実践的なスキルを磨きます。



### ❖❖ 修了生よりメッセージ ❖❖

上智大学 理工学部  
物質生命理工学科 准教授  
平成8年修了

鈴木由美子 さん



薬学部で学んだことを活かして

薬学の基礎学問の一つ、有機化学を専門分野とし、薬学部・薬学研究科にて大学院博士後期課程まで学びました。現在教育・研究に従事している理工学部において、薬学で学んだ創薬研究が私の独自性となっています。上智大学では、日本語だけでなく英語で教えることが求められますが、大学時代からコツコツと勉強していた英会話が大変役に立ちました。薬学のみならず、目を広げて、広い分野で活躍できる人材の輩出を母校に期待します。

特定医療法人駿甲会  
コミュニティホスピタル甲賀病院  
コメディカル統括科長 兼 薬剤科長  
平成13年修了

渡邊 学 さん



高度な人材育成を期待しています

創立30周年おめでとうございます。私は、2001年3月に薬学研究科博士課程を修了後、焼津市で病院薬剤師として勤務しています。薬学部で受けた教育や大学院での研究、基礎医学特論等の様々な講義は、私の臨床活動での基礎となっています。臨床現場では、臨床能力に加え、研究能力・マネジメント能力を持った人材が必要な時代です。母校から、これから薬剤師業務をリードできる人材が数多く育成されますことを願っています。

Assistant Professor  
Department of Neurology  
University of Texas Medical School  
at Houston  
平成14年修了

浦山昭彦 さん



ずっと学校にいるのだけれどね(笑)

知らない道を行こう。未だ知らないものに出会いたい。知らない人に会ってはじめての話をしよう。いつか違う道を択ぶというたったそれだけが、どれほど多様なことを連れてくるだろうか。じつとしてなどいられない。出会った何ものかが多様であればあるほど、うれしいだろう? 一様であることが、凡庸だと言っているのではない。寛容であることを大切にしながら、出会ったものたちと共に前を向いて歩いていきたいと思うのだ。

VLP Therapeutics  
(Gaithersburg, MD)  
Principal Scientist  
平成20年修了

浦上武雄 さん



これからの時代こそ大学でじっくりと

静岡県立大学で9年間学び、アメリカに移りました。基礎医学研究所、製薬会社を経て、現在バイオテックベンチャーでがんや感染症のワクチンを開発しています。世界中の子供達に健やかで希望に満ちた未来が来ることを願って。激しい競争や失敗の連続に負けず、何度もチャレンジすることで真の価値が生まれます。恵まれた環境の静岡県立大学では、新しいことに挑戦する姿勢と物事の本質を見抜く力を身につけてほしいと思います。

# 大学院 薬食生命科学総合学府 食品栄養環境科学研究院

Graduate School of Integrated Pharmaceutical and Nutritional Sciences

## 沿革

- 1991年 「大学院生活健康科学研究科(修士課程)」の開設  
食品栄養科学専攻および環境物質科学専攻より構成
- 1995年 「大学院生活健康科学研究科(博士後期課程)」の開設
- 1997年 「環境科学研究所」の開設
- 2001年 本学薬学研究科、静岡大学農学研究科・理工学研究科との単位互換を導入
- 2002年 文部科学省「21世紀COEプログラム」研究教育拠点に採択
- 2003年 静岡県工業技術研究所、静岡県環境衛生科学研究所、聖隸福祉事業団聖隸浜松病院等との大学院連携の発足  
オハイオ州立大学での科学英語海外研修プログラム(SHEP)の開始
- 2008年 ニュージャージー医科大学(現ニュージャージー州立ラトガーダー大学)での臨床栄養エキスパート演習の開始  
国際健康長寿科学カンファレンス(ICHALS)の開始
- 2009年 ネブラスカ大学リンカーン校との大学間連携の締結
- 2010年 タイ国マヒドン大学理学部・環境資源科学部との部局間連携の締結
- 2011年 国立長寿医療研究センターとの教育・研究協力に関する協定書の締結  
タイ国マヒドン大学、カリフォルニア大学デーヴィス校との大学間連携の締結
- 2012年 大学院教育組織として薬学研究科と統合し「大学院薬食生命科学総合学府」を開設  
「環境物質科学専攻」を「環境科学専攻」に改称  
「薬食生命科学専攻(修士課程)」を開設  
大学院研究組織として「大学院食品栄養環境科学研究院」を開設
- 2013年 「茶学総合講座」の開設
- 2014年 「環境科学研究所」を発展的解消し、「食品環境研究センター」を開設  
「茶学総合講座」を「茶学総合研究センター」に改組
- 2015年 カリフォルニア大学デーヴィス校との大学間連携の再締結

## 教育理念

### 【食品栄養科学専攻】

食と健康についての生命科学的探究を通じ、健康長寿社会の基盤の確立を目指すことを基本に、食品栄養科学における高い研究能力や幅広い知識を有し、企業や研究機関で主体的に活躍する高度専門職業人および研究者を育成します。

### 【環境科学専攻】

「地域・地球の環境を解析する」、「快適な環境を創る」、「環境応答を究め生命を守る」ことを基本に、専門的かつ幅広い視野で環境問題の原因を科学的に解明して持続可能な社会の構築をめざす高度専門職業人・研究者を養成します。

### 【薬食生命科学専攻】

「薬食同源」、「食薬融合」という共通認識をもつ学問領域の「薬食生命科学」を基盤に、薬学、栄養学、食品科学の知識を統合した薬食境界領域の先端的科学研究の担い手となる高度専門科学者・技術者を育成します。

## 教育方針

食品栄養科学専攻は食品科学大講座と栄養科学大講座からなり、食品科学大講座では、食品の化学成分、加工貯蔵技術、食の安全のほか食品の機能性、ケミカルバイオロジー、遺伝子工学及び植物機能開発などの教育研究を重視しています。栄養科学大講座では栄養素の機能や生体応答とともに、病気の治療における栄養・食事の管理や、生活習慣病予防に関する基礎的、応用的、実践的教育研究に力を注いています。

環境科学専攻は、地域・地球環境学コース、環境生命科学コース、環境共生学コースの3コースからなり、それぞれの視点から環境との共生・持続可能な社会の構築に資する人材の育成を目指して教育研究を行なっています。

薬食生命科学専攻は、疾病の成因の解明、薬物治療の適正化、医薬品の創成を目指す薬学領域と、食品の高次機能ならびに食品成分の動態の解明による疾病予防を目指す食品栄養科学領域との融合型先端的教育研究を展開しています。

## ❖ 食品栄養科学専攻の活動録 ❖

### フーズ・サイエンスヒルズ

2002年に開始された「一般型都市エリア事業」は「フーズ・サイエンスヒルズ」と命名され、2004年に「発展型都市エリア事業」として継承されました。「身心ストレスに起因する生活習慣病の克服を目指したフーズ・サイエンスビジネスの創出」をテーマとして、大学院薬学研究科や他大学、企業および県試験研究機関との共同研究を進めてきました。

### グローバルCOEプログラム(2007~2012)

2007年に文部科学省「グローバルCOEプログラム」研究教育拠点に採択され、「健康長寿科学教育研究の戦略的新展開」がスタートしました。本プログラムを活用して、海外の大学・研究機関との連携を強化し、国際的に活躍できる研究者や技術者の養成を行ってきました。

### 茶学総合研究センター

2013年に日本初の「茶学総合講座」を開設し、2014年に機能強化のため「茶学総合研究センター」に名称変更しました。食品栄養科学部、薬学部、経営情報科学部、薬食生命科学総合学府等で行われている茶に関する研究や情報を一元化し、県試験研究機関、行政・茶業界とも連携することで、茶に関する研究や人材育成等を推進しています。

### 静岡健康・長寿フォーラム

1996年より開催されている本フォーラムも2016年には第21回を数え、健康・長寿に関する第一線級の学術情報を静岡から広く世界に発信しています。

### 国際交流協定および教育・研究に関する協定

米国の大学の他にも、タイ国チュラロンコン大学(2009年)およびマヒドン大学(2011年)と部局間協定を、(独)国立健康・栄養研究所および(独)医薬品医療機器総合機構と教育・研究協力に関する協定書を締結しています(2012年)。

### 食品栄養科学専攻10年の歩み

本専攻は、1991年に創設された大学院健康科学研究科の1専攻としてスタートし、2012年に改組によって薬学研究科と統合した大学院薬食生命科学総合学府の中に、食品栄養科学を中心とする専攻として位置づけられました。現在は、食品生命科学大講座(11研究室)、栄養生命科学大講座(10研究室)および協力研究室(1研究室)が緊密な連携を図りながら、教育・研究を推進しています。

食品生命科学大講座では、静岡県の特産品である茶を始めとして、さまざまな食品に含まれる機能性成分の解析や未知成分の探索、遺伝子レベルでの機能評価、効率的な合成や生産法の検討、食品の安全性評価など、食品に関する研究を幅広く推進しています。栄養生命科学大講座では、生活習慣病を始めとする栄養関連の疾病について、予防法や治療法の開発、診断マーカーの検索に加えて、疾病的成り立ちの本質に迫る研究など、分子レベルの基礎的な研究からヒトを対象とした実践的な研究まで、広い範囲にわたって多様な方法でアプローチしています。また、本専攻は健康科学研究科時代を含む10年間に、教育・研究のさらなる充実と発展を目指して、以下の取り組みを行ってきました。

#### 米国大学との教育・研究連携の推進

2009年にネブラスカ大学リンカーン校、2011年にカリフォルニア大学デービス校と大学間連携を締結し、両校から招請する教授陣による集中講義や科学英語研修に、大学院生が参加しています。

#### 「静岡県立大学フードサイエンスネットワーク」の発足

静岡県立大学および食品栄養科学部創立30周年を記念して、現在研究に従事している卒業生や修了生を中心とする組織「静岡県立大学フードサイエンスネットワーク」を発足させ、2016年11月5日に発足記念シンポジウムと交流会を開催しました。



#### 高度専門職業人養成科目

##### 「臨床栄養エキスパート演習」の開講

2008年より、栄養専門職の実務の場や大学教育の場で実践的な研究・教育を担当できる実践指導者や実践研究者の養成を目的に、ニュージャージー州立ラトガーユニバーシティ(米国ニューアーク市)にて「臨床栄養エキスパート演習」を開講しました。2011年にはe-ラーニングを活用した研修システムを構築しました。

##### 「特別インターンシップI・II」による 「臨床栄養士」の養成

2009年より、管理栄養士資格を持つ大学院生が大学院連携先である聖隸浜松病院および藤枝市立総合病院において臨床研修を行うことで、「臨床栄養士(学会認定資格)」を取得することが可能となりました。

### ❖ 環境科学専攻の活動録 ❖

#### 2006～国内外の学会で受賞

学生の研究成果は国内外の学会で発表され、多くの学生が環境科学会、日本動物学会中部支部大会、環境化学討論会、バイオアッセイ・日本環境毒性学会、日本環境変異原学会、日本毒性学会、日本フードファクター学会などにおいて、最優秀発表賞、ベストプレゼンテーション賞、論文賞などを、International Conference on the Biogeochemistry of Trace Element、The 9th International PCB Workshopにおいてはポスター賞や特別賞を受賞しています。また、Environ. Mol. Mutagen誌のEditor's choiceに選ばれています。



#### 2007～ 富士山麓アカデミック&サイエンス(A&S)フェア

静岡中東部地域の高等教育機関の生徒が一堂に会し、日ごろの研究成果をポスター発表するA&Sに2007年より参加しています。本専攻からは20件から30件を発表し、毎年数名が優秀ポスター賞を受賞しています。

#### 2006～ アジアの国との国際交流

ベトナム、中国、ミャンマーなどアジアの国々から留学生の受け入れを行っています。博士後期課程の多くの修了生は、自國に戻って大学の教員になり、また、前期課程修了生は、国内外の企業に勤務しそれぞれ活躍しています。一方、2007年と2008年にはそれぞれ中国杭州市と静岡市でChina-Japan International Symposium on Indoor Air Pollution and Controlが開催され、2010年には大学間協定を、マヒドン大学(タイ)、浙江大学(中国)と締結し、現在に至るまで教員、学生ともども研究交流を推進しています。

## 環境科学専攻10年の歩み

**2006～ 環境科学研究所から環境生命科学科へ**  
教員は環境科学研究所を本務とし、国や県の研究機関とも連携して研究や教育を推進してきましたが、2014年に研究所が廃止され、食品栄養科学部の中に環境生命科学科が設立されました。

### 2010～ 3コース制の導入と フィールドワーク演習、資格取得支援

「環境」をより専門的かつ幅広い鳥瞰的視野で捉える能力を育成することを目的に、「地域・地球環境学」、「環境共生学」、「環境生命科学」の3コース制を導入し、各コースの特論を必修とし、現場体験の重要性からフィールドワーク演習を導入してカリキュラムの再編成を行いました。フィールドワーク演習では、森林生態系調査、富栄養化湖沼水質・底質調査、ニホンジカによる食害調査、産業廃棄物処理施設見学等の地域環境問題に関する実地演習を実施しています。一方、環境関連資格取得希望者に対して支援を行ってきましたが、その結果、環境計量士（濃度関係）や第1種放射線取扱主任者の試験に現役で数名の合格者が出ています。



**2012 環境物質科学専攻から環境科学専攻へ**  
学府設立時に、環境を鳥瞰的視野で捉える教育を重視するために、より研究分野が広い「環境科学」に専攻名を変更しました。

### 2014～ 学部-大学院一貫教育をめざして

食品栄養科学部に環境生命科学科が設置され、学部から大学院までの一貫した教育を実施することにより、食と環境の分野で活躍できる技術者、研究者の育成を目指し、現在、カリキュラムの改訂を検討しています。2015年には、環境生命科学科の一期生には先輩がいないため、環境計測、製薬・安全性評価系、県や市、食品系の各分野で活躍している修了生と学部生の交流セミナーを開催しました。



### 2014 食品環境研究センター開設

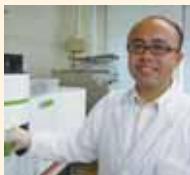
2014年に、旧環境科学研究所内にあった地域環境啓発センターを核に、新しく大学院食品栄養環境科学研究院の附置施設として開設されました。「食と健康」、「環境と健康」を視点に地域における健康と福祉の向上および地域産業の推進をめざして活動しています。

## ◇◇ 修了生よりメッセージ ◇◇

株式会社鈴与総合研究所  
食品・医薬品研究所  
平成28年修了

山梨智也 さん

「食」の分野で地元静岡の発展に貢献したい



大学院生時代は微生物による物質生産および異化に関する研究を行いました。現在は、その微生物を植菌するための培地用寒天に関する研究を中心とし、鈴与グループの食品事業をバックアップする業務を行っています。食品産業においては、微生物の発生を制御しつつ美味しさを保つことが重要であり、微生物について日々勉強が必要となります。私は本大学の経営情報学部出身であり、学部間の連携および地元企業との連携がより一層強くなることに期待しています。

UCLA School of Medicine

博士研究員  
平成24年修了

加治いずみ さん

静岡から米国へ

UCLAで消化管生理、特に管腔内化学受容機構に関する研究をしています。5年目にして漸く小さな研究費を獲得し、共同研究の依頼も増えました。静岡県立大学では管理栄養士を取得した後、食糧細胞研究室で分子生物学を、環境生理学研究室で腸の電気生理と組織化学の基礎研究手法を学びました。博士課程の期間中は、文献を読み、作業仮説を立て、実験結果を議論し、論文を書き、グランツを申請する、という基礎研究者の真似をすることに精いっぱい、あまり寝る暇がなかったように思います。初めて英語で論文が掲載された時の祝杯の美味しさと、世界中に自分の研究結果が残ると思った時の責任感は忘れられません。この基盤のお蔭で現在も食べると腸では何が起きるのか…という子供の時分の疑問を追いつけていられる事に感謝しています。



静岡県立大学  
食品栄養科学部  
平成18年修了

石塚典子 さん

今、できることを精一杯

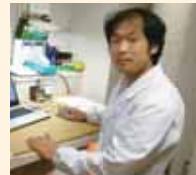


静岡県立大学創立30周年おめでとうございます。私は修士課程修了後いくつか他大学での教員を経て、現在は出身の研究室に戻り、助教として研究・教育に携わっております。他所を見て戻ってきてみると、本学部は学生に対する教員の数が多く、とても贅沢な教育環境だと感じます。私自身も在学中からたくさんの先生方に影響を受けてきました。学生には是非、大学生活で与えられる自由な時間を使って、多くの先生方から専門性を学んで頂きたいです。

静岡県立大学  
食品栄養科学部環境生命科学科 助教  
平成26年修了

望月智貴 さん

大学での教育と研究活動



地球の気候変動の要因を解明する研究は非常に幅広い分野にわたり、幅広い知識や思考と様々な技術が求められます。このやりがいのある研究活動を支えご指導くださった静岡県立大学の先生方に大変感謝しております。現在、私は同大学食品栄養科学部環境生命科学科の教員になり、研究だけでなく教育を通じて日々やりがいのある仕事をしています。同学科では充実した講義、フィールドワークを含む実習、研究を通じて自分の可能性を広げる場があります。

# 大学院 国際関係学研究科

Graduate School of International Relations



## 歴代研究科長

- 初代 高橋 徹 1991年4月～1993年3月  
(国際行動学研究分野教授)  
2代 畑 光夫 1993年4月～1994年3月  
(英米文化研究分野教授)  
3代 松本克己 1994年4月～1998年3月  
(英米文化研究分野教授)  
4代 小浜裕久 1998年4月～2002年3月  
(国際政治経済研究分野教授)  
5代 菱田雅晴 2002年4月～2004年3月  
(国際政治経済研究分野教授)  
6代 楠 正子 2004年4月～2006年3月  
(英米文化研究分野教授)  
7代 西山克典 2006年4月～2009年3月  
(アジア文化研究分野教授)  
8代 林 芳樹 2009年4月～2011年3月  
(ヨーロッパ文化研究分野教授)  
9代 武田修一 2011年4月～2015年3月  
(英米文化研究分野教授)  
10代 前山亮吉 2015年4月～  
(国際政治経済研究分野教授)

さらに、国際関係学研究科附置研究センターについては次の3センターを設け、活発な研究活動の拠点となっている。

- 2003年1月 現代韓国朝鮮研究センター設置  
(初代センター長 伊豆見元教授)  
2008年8月 グローバル・スタディーズ研究センター設置  
(初代センター長 中山慶子教授)  
2008年8月 広域ヨーロッパ研究センター設置  
(初代センター長 六鹿茂夫教授)

グローバル化社会で活躍できる  
高度な実践知の追究と育成

## 小史

国際関係学研究科(修士課程)は1991年3月に設置認可されました。2専攻(国際関係学専攻・比較文化専攻)、定員各5名計10名の入学定員からなるコンパクトな構成の研究科です。2016年3月までに244名が本研究科を修了しており、着実な歩みを見せています(女性156名、男性88名)。

## 国際関係学専攻について

国際政治経済研究分野と国際行動学研究分野を設け、分野ごとに専門の研究・教育を行っています。国際政治経済研究分野では、現代の国際関係を政治学・法律学・経済学・経営学などの視点から分析し、錯綜し流動する国際情勢を的確に把握し研究する能力を養成することを目指しており、具体的には国家間関係・国際企業活動の解明・地域研究に力点を置いています。国際行動学研究分野は、国際関係を社会学・社会心理学・文化人類学・コミュニケーション論等の行動科学的アプローチで分析し解明する方法を研究目標としています。その基本姿勢は国際関係を伝統的な「国家」間関係として硬直的にとらえるのではなく、「国家」の壁を超えたところで実質的に国際社会を動かしている民族的・宗教的集団やNGO活動など国境を超えた仕組みを重視した、柔軟であり広義の国際関係を研究対象としています。



大学院授業風景



国際関係学研究科院生室

## 比較文化専攻について

専攻共通の目標として、国際人に不可欠な資質として要求される幅広い比較の観点から、現代の国際社会で十分に活躍できる人材、異文化に接したときに柔軟に対応できるグローバルな視野を持った人材の養成を目指しています。そのような目標を実現するために、世界の様々な文化の有り様を言語・思想・宗教・文学・歴史などの観点から確実に把握し、さらに比較分析を加味することにより文化現象の本質を解明することを研究方法の中心に据えています。そのために本専攻では日本・アジア・英米・ヨーロッパの各文化領域に基づく4研究分野を設け、専門の研究を深めるとともに、言語及び文化の比較研究のための基礎原理と方法論を着実に身につけることによって、分野内及び分野間の比較にも及び得る幅広い視野の育成に力を注いでいます。

## 修士論文・院生

研究科発足当初の「研究指導責任者」体制を改革し、主指導教員と副指導教員による「複数指導」体制を導入して大学院生の研究指導にあたっています。大学院生は授業科目を履修しつつ、複数指導体制によって研究を進め修士論文を完成させます。大学院生は専用の研究室を利用して研究に集中する環境を確保するとともに、修士課程中間報告会において研究の経過を発表し、指導教員やその他の教員、大学院生からコメントをもらって論文執筆に活かします。近年は積極的に国内外の学会で研究発表を行う大学院生が多いです。所定の単位を取得し修士論文の審査に合格すると晴れて学位取得となります。学位取得要件である修士論文が在学中の最も重要な研究成果です。

修了後の進路は、他大学大学院博士課程進学、中央官庁職員、地方自治体職員、大学・短期大学・専門学校の講師、高等学校教員、マスコミ、商社などの民間企業などで、修了生は多方面で活躍をしています。

## 留学生

留学生の人数が多く、主にアジア地域を出身国としています。2006年度から2015年度までに修了した出身国別の留学生数は以下の通りです。

中国	38名	インドネシア	5名
スリランカ	3名	ベトナム	2名
韓国	2名		
台湾、ミャンマー、マレーシア、インド、ブラジル、ペルー、ウルグアイ、ルーマニア			各1名

また、2014年度より留学者を対象とした修士論文草稿への添削サービスを開始し、留学生支援の点で、着実な効果を見せています。

## 研究センターの活動

創立30周年誌で特筆すべきテーマは、研究科附置3研究センターの研究活動が着実な成果を積み重ね、特に国際交流面で活発な展開を見せていることです。同時にそうした研究成果をシンポジウム・講演会・ラウンドテーブル等様々な形式で公表・還元し、静岡県への地域貢献を果たしています。その一端を示すべく、過去3年の代表的な活動(地域貢献・国際交流)を各センターにつき以下に列挙します。

### ●現代韓国朝鮮研究センター

#### 2013年度

- ・県民公開シンポジウム「2014年の朝鮮半島情勢と日韓関係」(2014年1月22日、静岡市グランシップ)
- ・日韓ラウンドテーブル「日韓関係の現状と今後の展望」(2013年9月3日、ソウル大学日本研究所)

#### 2014年度

- ・県民公開シンポジウム「2015年の朝鮮半島情勢をどう見るか」(2015年1月19日、静岡市グランシップ)
- ・日韓ラウンドテーブル「日朝関係の現状と今後の展望」(2014年7月18日、東西大学日本研究センター)

#### 2015年度

- ・県民公開シンポジウム「2016年の朝鮮半島情勢と日本」(2015年12月18日、沼津市プラザヴェルデ)
- ・伊豆見センター長最終講義「朝鮮半島を見つめて40年」(2016年1月26日、静岡県立大学)



グローバル・スタディーズ研究センター県民公開シンポジウム



広域ヨーロッパ研究センターの  
アゼルバイジャン共和国特命全権大使講演会

### ●グローバル・スタディーズ研究センター

2013年度

- ・県民一般公開事業「しづおか・アフリカフェスティバル:アフリカの多様な食文化を知ろう」(2013年7月6日、静岡県立大学)
- ・カリフォルニア大学バークレー校との共催パネル「日米の障害者政策の課題と国際的役割」(2014年3月14日、カリフォルニア大学バークレー校)

2014年度

- ・県民公開シンポジウム「グローバル化時代の「共生」を問い合わせー他者との共存は可能か」(2015年1月31日、静岡市グランシップ)
- ・特別セミナー「障害者権利条約の実施:中国の市民社会と障害者組織の課題」(2014年10月21日、静岡県立大学)

2015年度

- ・国際ワークショップ“Reconsidering the Basic Human Needs for the East African Pastoralists : Towards the Localization of Humanitarian Aids”(2015年12月10・11日、静岡市グランシップ)
- ・カリフォルニア大学バークレー校との共催パネル“Beyond Local Citizenship : Immigrant Community and Immigrant Incorporation in Japan”(2016年1月20、21日、カリフォルニア大学バークレー校)

### ●広域ヨーロッパ研究センター

2013年度

- ・欧州議会議員の講演会「EU内のハンガリー人デイ・アスピラ」(2013年7月17日、静岡県立大学)
- ・アゼルバイジャン共和国特命全権大使の講演会「アゼルバイジャンの外交政策」(2013年11月26日、静岡県立大学)

2014年度

- ・ボジチ大学教授の特別講義“Turkey's Foreign Policy under the Crisis of Ukraine and Syria”(2014年7月16日、静岡県立大学)
- ・駐日EU大使の講演会「EUとアジア・太平洋地域」(2015年1月21日、静岡県立大学)

2015年度

- ・欧州議会副議長の講演会「ウクライナ危機の欧州安全保障体制へのインパクト」(2015年7月15日、静岡県立大学)
- ・ボジチ大学教授の特別講義「トルコの外交政策と国際情勢」(2016年1月12日、静岡県立大学)

### 今後の課題と展望

3研究センターの研究成果を蓄積させ大学院教育を充実させると同時に、現行の教育課程につき、たゆみない点検と改善を今後も継続して試みます。特に体系的なカリキュラム構築を追求してゆきたいと考えます。且つ実践的な科目(現行ではフィールドワーク・アカデミックイングリッシュ)の拡大・充実をめざしたい。さらに留学生対応・近時入学者が増加している社会人学生への対応も課題として認識しています。支援や修学しやすい研究環境の整備を年々充実させてゆくことが肝要です。また教職の専修免許プログラム、英語・日本語教育のプログラムについては大学院生のニーズに沿うものとして継続・発展をめざしたいと考えます。

## ❖❖ 修了生の声 ❖❖

国際関係学専攻 2015年度修了  
北海道電力(株)

高木 圓 さん



比較文化専攻 2003年度修了  
MIRAI日本語学校・代表

レイ・ティ・ホン・ヴィンさん



中央で起立しているのが執筆者

私は2009年から2015年までの6年間、静岡県立大学に在籍しました。大学3年時よりウクライナ国際政治を研究し、大学院1年時にはロシア留学の機会もいただきました。2ヶ月という短い期間でしたが、机上では学びきれない、欧米社会とは全く異なる旧ソ連地域の人々の感覚・考え方・文化・歴史を肌で感じ、自身の研究の発想の幅を広げることができました。また、先生方のご指導により「自ら調べて学習する力」「論理的な考察力」「書類の構成能力」「発表能力」という、「本質を見極める」ことから「人に伝える能力」までの一連のプロセスに必要な力を養うことができました。

私は福岡県の出身ですが、現在は北海道電力(株)の社員として地元のお客さまに密接な仕事を担っています。当社を選択した理由は、ロシア留学で初めて極寒地域で生活したこと、北国のインフラ事業の重要性を感じたためです。前述したスキルは、仕事や社内の意見交換の場で役立っています。電力供給の責務を実感し、当社業務にやりがいを感じておりますが、将来、当社を取り巻く経営環境が変化し、当社事業が海外へビジネスチャンスを見出せる機会があれば、そのときは修了した国際関係学の切り口を活かして会社に貢献できる社員でありたいと思います。

当社を含め、現在のビジネス界では「多様な人材を積極的に活用しよう」というダイバーシティ化や女性の活躍推進への取り組みが急速に高まっています。女子学生や留学生が多く、積極的に海外へ出て物事を柔軟に多角的に考えられる国際関係学部・研究科の後輩の皆様は、まさに次世代社会を牽引する重要な人材になる可能性を秘めているのではないのでしょうか。私も社会人としても、当社社員としてもまだ未熟ではあります。本校の卒業生として、そのような人材に近づけるように、これからも職場で精進して参りたいと思います。

私は1998年10月に私費留学生として静岡に来ました。将来日本語教師になりたいと思い、1年半かけて日本語学校を卒業した後、日本語教授法を研究することのできる大学院に進学すると決めました。調べてみたところ静岡県立大学で希望がかなえられることがわかりました。県立大学は近くにあるので、行ってみることにしました。赤いレンガの建物、青々とした芝生、県立美術館と繋がっている緑あふれる裏道。環境の良さはとても印象的で、学生生活をおくるには素晴らしい、「ぜひここで勉強したい」という想いが強まりました。

その後日本語教授法がご専門の水野かほる先生と連絡を取りました。「大学院での勉強や研究には日本語能力が不足していますし、大学での専攻も希望する大学院での専攻とは異なるため、一年間研究生として入学するよう」アドバイスを頂きました。「研究生になる条件は日本語能力試験1級に合格すること」で、まだ3級程度だった私にはかなりハードルが高いものでした。12月の試験まで僅か5ヵ月しかありませんでしたが、入学したいという熱い想いを胸に抱き必死に頑張りました。

大学院に入学できましたが、限られた日本語能力で苦労しました。そんな私を優しく熱心に指導して下さった先生方のおかげで充実した学生生活を送ることができました。特に指導教官の水野先生からはいつも温かいお心遣いをいただき、挫折や困難を乗り越えられる力をいただきました。2002年に日本語教育能力検定試験に合格し、2004年に無事修士課程を修了しました。

現在はホーチミンシティで日本語学校を運営し、日本や日本文化が好きで日本語を一生懸命勉強している若者達のために、県立大学で身に付けた知識やスキル、さらに日本で得た貴重な経験を活かすことができるよう頑張っています。そうすることこそが、日本、静岡、恩師である先生方、そしてお世話になった多くの日本の方々への何よりの恩返しだと思います。

写真提供 望月良憲

# 大学院 経営情報イノベーション研究科

Graduate School of Management and Information of Innovation



## 沿革

1997年(平成9年)	大学院経営情報学研究科(修士課程)の設置を認可される
1998年(平成10年)	初代研究科長、青山英男教授
2000年(平成12年)	第二代研究科長、影山喜一教授
2001年(平成13年)	社会人を対象とした「社会人ビジネス講座」の試みを開始
2003年(平成15年)	静岡県が整備する遠隔講義システムの利用開始
2004年(平成16年)	第三代研究科長、渡部和雄教授 地域経営研究センターを設置するとともに昼夜開講制を導入 経営情報学部棟内に遠隔講義システムを整備 非営利組織マネジメント講座や寄付講座の開講を試みる
2005年(平成17年)	教職課程(高等学校専修免許)「商業・情報」設置 静岡大学大学院人文社会科学研究科との単位互換協定を締結 通常大学院講義における遠隔講義配信の試みを開始
2006年(平成18年)	社会人を対象とした各種の講座を「社会人学習講座」の名称で統合し、地域経営研究センターが運営事務局となる
2007年(平成19年)	第四代研究科長、小山秀夫教授 この年より独立法人行政化して静岡県公立大学法人静岡県立大学となる
2008年(平成20年)	第五代研究科長、奥村昭博教授
2010年(平成22年)	「経営情報イノベーション研究科」(修士課程)の設置が受理され、また、新名称のもとで県内初の社会科学系大学院博士後期課程の設置を認可された。また、博士後期課程の学位は博士(経営情報学)と博士(学術)のいずれかの選択が認められる
2011年(平成23年)	経営情報イノベーション研究科(修士課程/博士後期課程)の設置 初代研究科長、奥村昭博教授 医療経営研究センターを地域経営研究センターから分化して設置
2012年(平成24年)	第二代研究科長、松浦博教授
2013年(平成25年)	第三代研究科長、金川幸司教授 ICTイノベーション研究センターを設置
2014年(平成26年)	博士後期課程の第1期生が修了 修士の学位に「修士(学術)」の追加を認められる

## 教育理念

現代の社会状況は変化を続け、日本社会の将来についてはローカル／グローバルなレベルにおいて従来のスキームでは十分に対応できない様々な課題が顕在化している中、新たな発想で道を切り開く方策への期待が高まっています。こうした時代に即した社会的要請に応えるために、経営、公共政策、情報を柱とし、社会における様々な課題解決につながるイノベーションを推し進める高度かつ実践的な研究教育を行い、将来のイノベーションの担い手、高度な専門的人材を育成します。

## 教育方針

修士課程においては、学術活動における高い問題意識と知識へのあくなき希求が鍵であると考え、こうした知的体験を通じて、経営、公共政策、情報に関する専門的かつ実践的な知識を有し、それらを基軸としたイノベーションの担い手となりうる高度な専門的人材を育成することを目指します。

博士後期課程においては、修士課程の研究教育分野を基礎としつつ、社会的課題を的確に把握し、あらゆる社会的領域にイノベーションをもたらす仕組みを創造できる人材を養成します。

## 大学院経営情報イノベーション研究科10年の歩み

### 地域経営研究センター

地域経営研究センターは、2004年に大学院の付属機関として設立されました。主な活動は、①社会人学習拠点としての社会人学習プログラムの開発・実施、②地域政策をめぐる新たな理論やアプローチの探求、地域の当面する諸問題の解決策の提言です。歴代センター長は、影山喜一（初代2004-06）、西田在賢（第2代2006-2011）、岩崎邦彦（第3代2011-現在）が務めています。2011年には当センターから分化、発展した形で「医療経営研究センター」が設立されました。両センターは、それぞれの専門を生かし、社会人学習講座などにおいて有機的な連携を行っています。



### ICTイノベーション研究センター

ICTイノベーション研究センターは、2013年度に開設されました。社会の様々な分野における「イノベーション」の基盤となる情報通信技術(ICT: Information and Communication Technology)を対象とした研究を実施し、静岡県をはじめとした地域の発展に貢献することを目的として、2013年4月に大学院の付置研究センターとして設立されました。

初代センター長には齊藤和巳教授が就任しました。ソーシャルメディアを通した社会状況の分析や、先端的な情報システムなど、情報通信技術を土台に、地域社会・産業界・NPO・自治体・国内外研究機関と密接に連携し、社会の様々な分野における「イノベーション」のサポートも行っています。2015年度、第2代センター長に湯瀬裕昭教授が就任しました。

### 医療経営研究センター

医療経営研究センターは、本学25周年記念事業の一環として2011年4月に開設されました。経緯は2009年度当時の地域経営研究センター長の西田在賢（現本研究センター長）が静岡県健康福祉部から県内公的病院幹部を対象とした医療経営人材養成講座の企画運営事業を受託し、それを発展させました。同事業には2014年3月まで2期5年、静岡駅前に設けたセミナー室に県内全ての公立病院を含む32の公的病院から延べ200人を超す診療及び事務の幹部が参加しました。同室は現在草薙キャンパス看護学部棟内に移して活動しています。



### 日韓交流セミナー（2008年～）

韓国の延世大学と毎年交互開催による「共同学術セミナー」を開催してきました。公会計、地域産業、社会的企業などのテーマを中心に学術交流を行ってきました。延世大学で開催予定の今年（2017年）は10周年を迎えます。



### 博士後期課程一期生の修了

2014年3月、経営情報イノベーション研究科博士後期課程第1期生5名が修了し、伏見卓恭君が学長賞を受賞し、グアランさんが学位授与式において研究科代表として学位記の授与を受けました。



### 社会のあらゆる分野におけるイノベーションの担い手となるスペシャリストをする経営情報イノベーション研究科の活動録

#### 地域経営研究センターの活動

地域経営研究センターは、社会人学習講座の開催、スルガ銀行等の寄付によるビジネスセミナー等を通して、研究成果の地域発信を行い、地域貢献に力を入れています。2015年度は、「社会人学習講座」を22講座開講とともに、ビジネスセミナーや研究会・シンポジウムを通して、研究成果などを地域に発信しています。



#### 医療経営研究センターの活動

前ページで示した講座の他に地域経営研究センターと連携した社会人学習講座企画や公開セミナー、政策研究会を毎年開催しています。

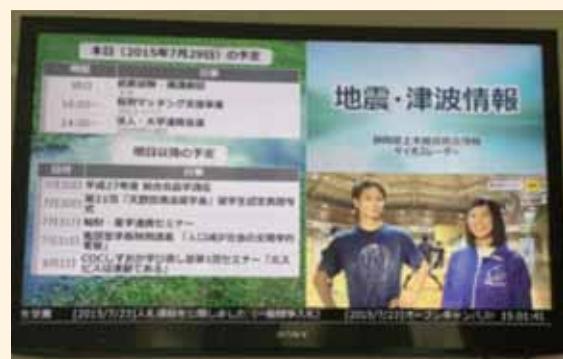
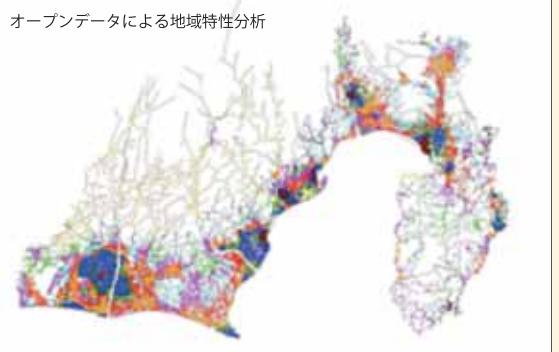
・(2011年度)本学創立25周年記念特別公開セミナー『日本の地域医療体制を考える』・(2012年度)スルガ銀行寄附セミナー『静岡と東京で医療・介護保障と税の一體改革を考える』・(2013年度)一般公開セミナー『(静岡で)地域完結型医療・介護保障を考える』・(2014年度)政策研究会『人口減少社会における病院の経営持続性を考える』・(2015年度)政策研究会『地域の医療介護総合確保のマネジメントを考える』・(2016年度)本学創立30周年記念政策研究会『地域医療構想と新公立病院改革のための英国病院トラスト考:ひるがえってわが国の地域ヘルスリーフォームを考える』(下記の写真)



#### ICT イノベーション研究センターの活動

ICTイノベーション研究センターには2つの研究部門があります。データサイエンス研究部門では、オープンデータやソーシャルメディアなどのビッグデータに内在する法則性発見などを効果的に実現する方法論を探求しています。先端情報システム研究部門では、市民生活や企業活動を支える先端的な情報システムを、地域社会をフィールドとして実証的に研究開発を行っています。研究部門を越えた、研究者の横断的な研究にも力を入れ、戦略的競争資金SCOPEや科研費などの外部資金を獲得し、研究活動を行っています。この他に、本学と他大学をJGN-Xで結んで地域防災情報シンポジウムの開催などを行っています。

オープンデータによる地域特性分析



学内デジタルサイネージ

#### 国内外の学会等での学生の受賞

2016年に、博士後期課程2年の山岸祐己さんが『DEIM 2016第8回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム(第14回日本データベース学会年次大会)』において、学生プレゼンテーション賞を受賞したほか、数多くの学生が国内外の学会等で受賞をしています。

21世紀に入って、国内外の社会情勢やテクノロジーは大きく変化しており、近い将来においてはさらに激しい変化が予想される状況を受け、大学院経営情報イノベーション研究科は、経営情報研究科を前身として、高度な専門知識を有するのみならず、それらを融合的に駆使して社会の変化に柔軟に対応できる人材育成を目的として、2011年に設置されました。同時に、より高度な能力をもつ人材育成のため、博士後期課程を設置しました。本研究科では、経営、公共、情報の3分野を軸に、各分野における専門的研究とそれらを融合した領域における研究の推進、およびそれらを担う人材の育成を進めています。一方、経営情報研究科では、研究成果の地域社会へのフィードバックを目的として各種講座を開催

しており、この拠点として2004年に地域経営研究センターを設置しました。2006年には各種講座を社会人学習講座として統合し受講の利便性を向上し、現在に至るまで講座の拡充を進めてきました。2013年から開始された第2期中期計画では、社会人学習講座の枠組みの下、外部と連携しての多彩な内容の講座開催に注力しています。地域経営研究センターに加え、2011年には医療経営研究センター、2013年にはICTイノベーション研究科を設置して、これら3センターを研究の基盤とした研究推進体制を構築しました。2013年から開始された第2期中期計画では、センターの枠を越えた複合的領域の研究に注力し、研究を進めています。

### ◆◆修了生よりメッセージ◆◆

ふじのくに  
みらい共有センター  
2015年修了

大城 祐子 さん



#### 地に足が着いた活動のできる人材育成を期待

現在は、地域で活躍できる人材の育成と、健康や食に関するマーケティングを専門に研究しています。当研究科は地域に貢献する役割も担っていますが、地域の課題は、一見単純に見えても実は多様で複雑であり、この役割も広く深い意味合いが含まれていると思います。これから先の見えない時代を生き抜いていくためにも、その複雑さや曖昧さを受け入れ、地に足が着いた活動のできる人材育成を大学に期待し、また私も担っていきたいと思います。

Think globally, act locally!

筑波大学

2014年修了

伏見 卓恭 さん



#### たくさんの出会いが、今の自分に大きく影響

私の研究は、近年爆発的に普及したソーシャルメディアから得られるビッグデータを解析、モデル化することで有用な知見を見出し、現実のサービスに応用することで人々の暮らしを豊かにすることです。この研究分野の魅力として、人工知能を含む様々な技術が秒単位で進化する点が挙げられ、最先端の技術動向を常に注視しなければならないのがやりがいの1つです。現在は、非常勤講師としていくつかの教養科目を担当しながら、教育と研究活動に従事していますが、大学院時代に培った経営学や情報学の枠にとらわれない横断的、革新的な知識や考え方方が、研究活動に役に立っていると思います。

伊藤会計事務所

2013年修了

山田 博己 さん



#### 教養を身につけ専門性を深める場

主に医療機関をお客様とする会計事務所で、所内で記帳を代行し、特定の時期に決算や各種申告書の作成を行い、所外へ税理士に同行してお客様から税務をはじめとしたご相談を賜わるといった、税理士補助業務をしています。仕事上、税務や医療の専門的な知識や言葉を学ばなければなりませんが、それを身につけるための不斷の学習の重要性を痛感しています。仕業に限らず多くの仕事で専門性が求められているため、大学が教養を身につけ専門性を深める場であることを願っています。

# 大学院 看護学研究科

Graduate School of Nursing



## 沿革

- 2001年(平成13年) 大学院看護学研究科(修士課程)の設置(2領域8専門分野)(第1期生中国人留学生を含む6名入学)
- 2003年(平成15年) 看護学研究科第1期生5名修了、カリキュラムの再編成(1領域6専門分野)
- 2004年(平成16年) 静岡県立静岡がんセンターとの連携大学院の開始
- 2007年(平成19年) 設置者が静岡県から静岡県公立大学法人へ移管(大学法人化)
- 2010年(平成22年) 大学院看護学研究科における助産師教育課程の開始(看護学専攻8専門分野)
- 2015年(平成27年) 小鹿キャンパスに新看護学部棟が完成、看護学部および看護学研究科の教育・研究拠点を小鹿キャンパスに移転し、2つのキャンパスに拡充
- 2016年(平成28年) 小児看護学分野高度実践看護師教育課程の認可

## 教育理念

看護学研究科は人間尊重の理念に基づき、専門的知識と実践能力を活用して、教育・実践・研究活動を担う人材を育成します。生命関連領域の諸科学と連携し、保健・医療・福祉の場において看護科学の探求者として、また看護職のリーダーとして人々の健康の増進に寄与することを目的としています。

## 教育方針

### 【ディプロマ・ポリシー】

- 必要単位を修得し、次のような者に学位(修士)を授与します。
- 豊かな人間性と見識をもった看護専門職としての活躍が期待できる。
  - 生命諸科学と連携し、看護科学の高度な専門知識や技術による活躍が期待できる。
  - 研究や人材開発能力を修得し、看護科学の発展への寄与が期待できる。
  - 国際保健の分野を含め、広く社会のニーズへの的確な対応が期待できる。

### 【カリキュラム・ポリシー】

看護学の実践・教育・研究の土台となる理論、技法、および看護専攻領域の専門知識を身につけ、看護の特定の領域における科学的な知識や実践能力、研究的な思考能力を醸成する。

### 【アドミッション・ポリシー】

看護学研究科では以下の学生を求めています。

- 柔軟な思考や探究心をもち、主体的に学ぶ姿勢をもつ人
- 看護の発展に貢献する意欲をもつ人
- 新たな知識や技術を修得し、専門性を深めようとする強い意志をもつ人
- 社会への关心や国際的な視野を広げようとする強い意志をもつ人

## ◆◆ 看護学研究科の活動録 ◆◆

### 2012 性教育の実施

助産学分野では、日本助産師会の掲げる助産師の役割と責務の1つである「ウイメンズヘルスにおける役割・責務」としてリプロヘルスサポーターの資格を取得するための講義を組み入れています。リプロヘルスサポーターとは、受胎や避妊の指導・支援、性感染症の予防、女性のライフサイクルにおける性の問題に取り組む国家資格者です。講義の中で平成24年度は、静岡県立大学薬学部の2年生30名に性教育を実際に実施しました。その後は、性教育指導プログラム作成に重点を置いていますが、晩婚化、晩産化、不妊症の増加が少なからず影響している出生率の低下に歯止めをかけるためにも、自分の身体を知って守るための性教育が必要不可欠であるとの考えを基に今後も実際に性教育実施に出向く場を広げていきたいと考えています。

### 地域に貢献：牧之原市、 伊豆の国市での調査研究を実施

看護学研究科の保健・医療システム学領域の大学院生が、2010年に「地域に在住する高齢者の低栄養状態の実態とその原因となる食に関する生活環境要因」をテーマに研究を行い、行政保健師の公衆衛生活動における役割を検討しました。また、2011年には「地域在住高齢者のソーシャルキャピタル」をテーマに研究を行い、尺度開発と地震災害時の避難行動に与える影響に取り組みました。保健・医療システム学領域では、静岡県内の地域に目を向けて地元とタイアップした研究や地元に貢献できる調査や研究に取り組んでいます。

### 2010 周産期における死別に対する助産ケア

看護学研究科の太田尚子教授が代表を務める、死産・新生児死亡を経験した家族のセルフヘルプグループ「天使の保護者ルカの会」を含めた聖路加看護大学(現:聖路加国際大学)看護実践開発研究センターの4事業は、11月24日内閣総理大臣官邸において「平成22年度子ども若者育成・子育て支援功労者表彰、子育て・家族支援部門、内閣府特命担当大臣表彰」を受賞しました。

### 看護学研究科10年の歩み

看護学研究科は、平成13年4月に、高度看護専門職、看護管理者および看護学研究者の養成を目標に、学生定員1学年16名で開設し、開設時は看護基礎学領域・看護実践学の2領域編成でした。その後の看護職の卒後教育の実情や教育ニーズを鑑み、カリキュラムの一部改正を行い、平成16年度より看護実践学の1領域編成とし、保健医療システム学・看護管理学・成人老人看護学・小児看護学・母性看護学・地域看護学の6つの看護専門分野に再編しました。さらに平成18年4月に精神看護学、平成21年4月には看護技術学分野を開設し、専門分野の充実を図ってきました。平成19年4月の法人化により、学部および研究科は、平成19年度以降の5年間の事業計画を策定し、計画達成にむけて取り組みました。平成20年には、近年の保健医療分野の変化に伴い、専門性の高い知識と技術を持った看護職が一層求められるようになったことに応えて、カリキュラムの見直しを行い、専門分野の科目の充実を図りました。平成21年度には、大学での助産師育成課程を設置し、母性看護学分野を助産学分野に変更し、平成22年4月より助産師養成教育を開始しました。

看護学研究科の広報活動として、研究科パンフレットを毎年刷新し、県内外の保健医療機関に配布し、研究科への理解を頂くと共に学生数の確保にも取り組んでいます。また、オープンキャンパスを年2回開催し、さらに静岡県内の医療機関をはじめ看護学部が実習を依頼する病院の方々に特別講義を公開し、地域に根ざした大学院としての存在を確固たるものにするべく取り組んでいます。

## 第2章 教育・研究30年の歩み

表1. 看護学研究科修了生 学位論文題目一覧（2006年以降）

修了年度	専攻分野	修士論文テーマ	修了年度	専攻分野	修士論文テーマ
平成18年度	保健医療システム学	中国の看護師におけるバーンアウトに関する調査研究 職場環境のストレス、ソーシャルサポートとバーンアウトの関係	平成23年度	看護技術学	活動性の低下した高齢者の便秘改善に関する研究 施設入所者を対象とした用手微振動の有効性の検証
	地域看護学	介護保険部門に配属された保健師の相互理解に関する研究 他職種との連携構築の過程から		保健医療システム学	生活予後診断を遷延性意識障害看護に導入する意義 地域在住高齢者のソーシャルキャビタル
		インドネシアの地域母子保健活動における保健ボランティアの 助役付け要因			尺度開発と地震災害時の避難行動に与える影響
		Ⅱ型糖尿病患者の食べることの意味の記述 食べるこの話りとその解釈		成人・老人看護学	看護師が家族ケアにおいて経験している困難 終末期がん患者の退院支援に焦点をあてて
	成人・老人看護学	ケアスタッフが認知症高齢者と“通じ合う”という経験に関する研究 看護師と患者の間にはならぬ「手」の現象学的考察			看護師の終末期がん患者の在宅移行を進めるプロセスに関する研究
		臨床現場における看護師が経験している“気づき”に関する研究			肺がん患者の治療経過に伴う情報にまつわる体験 化学療法を受けながら療養生活を営む患者に焦点をあてて
	母性看護学	リハビリテーション過程における家族の“障害受容”をめぐる経験 卒中患者を持つ家族（配偶者）を対象として		助産学	母子異室における産褥早期の疲労の現状とそれに関連する要因について 助産師の考える妊娠期からの継続ケアが分娩期のケアへ与える影響 育児期の母親の心情に影響する夫からの言語的コミュニケーション に関する研究
	母性看護学	母親の哺育行動に伴う問題と対処行動に関する基礎研究退院後 から産後1ヶ月までの母親の哺育行動		保健医療システム学 成人・老人看護学	要介護高齢者の「立位姿勢」再獲得のための運動プログラム作成 救急外来に心肺停止で来院し死亡した患者の家族に対する看護援助
	小児看護学	極低出生体重児を出した母親のゆらぎ 初期の子どもとの関わりに焦点を当てて 震災時学童期で遺児となった子どものビア・サポート		助産学	妊娠の性生活に関する健康教育を行う助産師の意図、行動に 関連する要因 計画的行動理論を用いて
平成19年度	看護管理学	新卒看護師の意欲を高める経験の意味の分析		助産学	妊娠1年前から妊娠中に転居を経験した母親の妊娠期から育児 期にかけた相互扶助構築過程
	地域看護学	慢性疼痛に対し鍼治療をうける高齢者の体験 在日ペルー人の精神健康に影響を及ぼす異文化ストレスと対処法 との関連		小児看護学	父子早期接触が第一子誕生後1~2か月の父親のメンタルヘルス に及ぼす影響
	成人・老人看護学	ニジェール農村部に暮らすソンガイ・ザルマの女性にとっての産む ことの意味 救命急救センターに勤務する看護師の重度意識障害患者の家族 への関わるべき特性			医療的ケアが必要な児童の母親の自己効力感に関する研究 予期せぬ子どもを亡くした母親の体験から導かれたケアニーズ
		がん告知後の患者への外来看護師の関わり		助産学	産後1~7か月の初産婦の自立と退院直後から産後1か月までの 実母からの支援との関連
		C型肝炎から肝細胞がんにいたった患者の生活の体験に関する研究 戦後の産業看護の歴史的経過と今日的位置づけに関する研究 思春期男子における睡眠と骨密度に関する基礎研究			胎児異常を告げられて妊娠継続した母親が妊娠中に望む看護者の言動 10代で妊娠した女性の母親としてのアンデンティティ形成過程
	母性看護学	大学生のコトーム使用の実態とその促進・抑制に及ぼす要因の検討		小児看護学	先天性疾患を抱える子どもの父親の気持に関する研究 在宅中心静脈栄養法を受けたがん終末期療養者の家族が介護した体験 地域で親と暮らす中年期統合失調症者が考えている 老後の生活への備え
平成21年度	看護管理学	中堅看護師にとっての「生き方の模索」	平成25年度		問題行動を呈した独居高齢者に対する支援
	保健医療システム学	転機に直面している看護師の姿 行政機関に働く保健師の倫理的感受性に関する研究		保健医療システム学	静岡県内の病院における障害を有する看護師の雇用状況と雇用 に関連する要因
		男性専任大学教職員における職務中の喫煙行動に関する実態把握に ついで 男性専任大学教職員の喫煙行動状況と喫煙行動要因について		産業看護活動に影響する要因 活動上の困難と事業所規模別の相違	
	精神看護学	思春期精神科看護師のルールに対する捉え方とルール適用時の 課題について 精神疾患に罹患した母親への子育て支援について 精神科急性期病棟における多訴の患者に関わる看護師の患者 理解と対応について		看護管理学	妊娠期における看護師の体験 妊娠期において妊娠の「産む力」を育む開業助産師の関わり
		終末期がん看護に携わる看護師の感情体験と看護継続の様相 ホスピス・緩和ケア病棟に焦点をあてて		助産学	妊娠の体重増加に対する認識と体重増加量の関連 「過少体重増加」に焦点を当てて 地方都市の助産所における産後ケアへのニーズ 家族がお産に立ち会う際の助産師のケア 初めて子育てをする母親とその実母の出産前後の里帰りを通して 関係性再構築のプロセス
平成22年度	保健医療システム学	特別養護老人ホームにおける介護職からみた看護職と介護職の 連携 医療ニーズを抱える利用者への対応に関する研究	平成26年度	小児看護学	血友病児の家庭治療に関する研究 貼付用局所麻酔剤の使用を試みて 在宅で学童期から青年期の障がい児(者)を育てている父親の体験 入院時のプレレーションに関する研究 絵本の活用
	小児看護学	日帰り手術を受ける子どもの母親の不安		精神看護学	統合失調症者が手術を受けた体験について
	看護管理学	回復期リハビリテーション病棟看護師が提えた日常生活行動援助の分析			雌下訓練において看護師の体験している困難感の特性 新人看護師が先輩看護師から得る学び 判断を中心とした臨床実践能力の特性
	成人・老人看護学	「腎不全患者の血液透析導入後のセルフケア能力」保存期の自己 管理への取り組みと導入前の支援の視点から 退院後の結腸がん患者が初回外来受診までに体験する手術からの回復		成人・老人看護学	臨床看護による退院支援活動評価 訪問看護師からの フィードバックの有無及び一般特性別比較の視点から 遠方の病院に入院する軟部内臓の患者と家族の相互作用の特性 妊娠末期の身体活動量が分娩に及ぼす影響
	地域看護学	AIDS患者の心理過程と援助者に対する拒絶感受性の関係につ いての研究 児童養護施設における児童間の性暴力発生についての検討		助産学	第2子を迎えた母親の妊娠中から産後6か月における育児への困難 助産所助産師が実践している会陰裂傷予防に関する助産ケア 中学生の娘を持つ母親における家庭での性教育実施を阻む要因 死産を経験した次妊娠をしている母親への助産師のケア 我が国におけるBaby Friendly Hospitalの認定に影響する要因の検討 就労女性の妊娠に向けてのヘルスリテラシーに関する調査
	看護技術学	長期臥床高齢者の関節拘縮改善による日常生活動作拡大に関する研究 用手工微振動などをムーブメントプログラムによる効果の実践的検証			
	精神看護学	植込み型除細動器(ICD)を植込んで生きる体験 ICD植込み後5年以上を経過した壮年期患者の場合			

表2. 看護学研究科学生数（2006年以降）

入学年度	専攻分野別								合計
	保健・医療システム学	看護管理学	看護技術学	成人・老人看護学	助産学	精神看護学	小児看護学	地域看護学	
平成19年度	0	1	0	4	2	0	0	3	10
平成20年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成21年度	2	1	0	0	0	4	0	0	7
平成22年度	2	1	2	2	0	1	1	2	11
平成23年度	1	0	2	3	3	0	0	0	9
平成24年度	0	0	1	1	3	0	2	0	7
平成25年度	0	0	0	0	3	3	1	0	7
平成26年度	1	1	0	0	5	1	3	-	11
平成27年度	0	0	0	4	7	0	-	-	11
平成28年度	1	0	0	1	4	2	-	-	8

## ◆◆ 修了生よりメッセージ ◆◆

総合母子保健センター 愛育病院

2011年修了

木寺 雅希 さん



在校生の皆様へ

私は今、助産師として総合周産期センターで勤務しています。私が勤務している愛育病院は、分娩件数は年間2500件ほどで、小児科を併設しており、母子に優しい病院として都内の母子保健医療の向上に努めています。大学院時代は各分野の専門家に講義を受けることが出来、本当に贅沢な授業でした。助産師はとても専門性が高い職業であり、学術的な知識の大切さを実感します。大学院でこのような知識を学べたことは今現在自分の糧になっていると感じます。静岡県立大学での助産学分野は設立間もないですが、今後、更に大学院で学ぶ助産師が増え、より質の高いケアを提供出来たらと思います。

地方独立行政法人 静岡県立病院機構  
静岡県立総合病院  
2004年修了

鈴木 かおり さん



学びは自分が自分と向き合う貴重な経験

私は現在、がん看護専門看護師資格を取得後、緩和ケアチームで働いています。がん医療の中でも緩和ケアの役割は重要性を増し、がんと共に生きる患者さんやご家族に寄り添い、看護を行っています。その素地を養えたのが大学院の2年間でした。看護学の専門性や、病を患う人を見る姿勢や志向性を学ぶ一方で、自分の思考の未熟さに真摯に向き合う貴重な経験でした。学びにゴールはないという事を学び、今も尚どんな状況にある人にも手を差し伸べ、勇気と希望をもってケアする糧となっています。ぜひ、皆さんもそれぞれの学びを深めていってください。

静岡赤十字病院

1-5病棟(救命救急センター病棟)

2007年修了

三浦 智美 さん



漫然とした日々からの脱出

30歳を過ぎ、何なく変化を求めていた時期に「先生が魅力的、家から近い」という理由で進学しました。看護は科学的な実践ですが、大学院では自分の経験や感覚的な側面を深掘りし、知識を広げることができました。それは看護師長として「根拠のある実践だけでなく、『何か変』に気づいて行動できる看護師になる人材を育てる」という現在のビジョンに繋がっています。大学院で学ぶことで漫然とした日々から次のステージが見えてくると思います。

静岡県立大学

看護学部

2004年修了

山田 貴代 さん



県立大学看護学部で働いて約10年になります。

研究科を修了後、静岡県立大学の看護学部で母性看護学、助産学領域の教員として働いて約10年になります。臨床での実習の際に、実習病院で卒業生、修了生の方たちの元気な笑顔に会える機会が増えました。忙しそうに、でも充実したお顔を見ると、臨床で患者さん達、同僚の方達に頼りにされているのだろうと思います。また、臨床指導者として後輩である学生を指導していただくこともあり、臨床での成長された様子を実感できるのは、幸せなことです。今後、臨床で経験を積めた卒業生が、静岡県立大学の研究科に戻って、再び大学で学ばれるように期待しています。